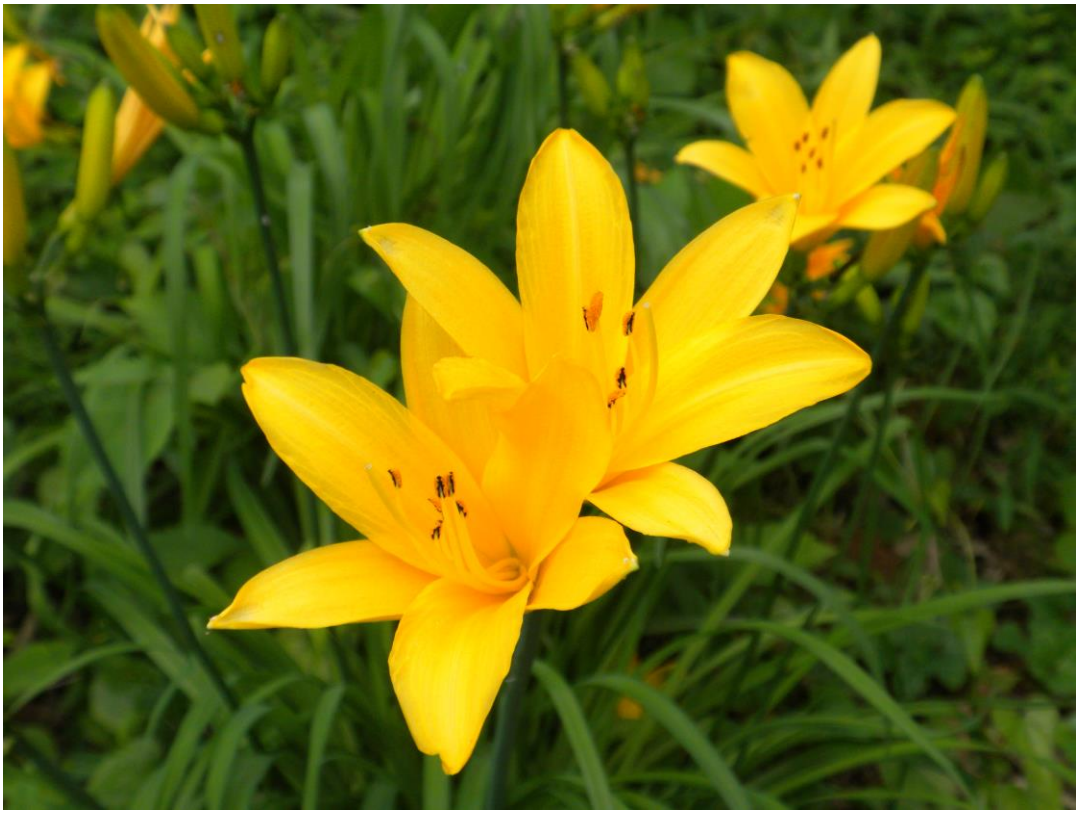
赤米ニュース

第 294 号
（2021 年９月30 日）



東京赤米研究会

〒186-0005　東京都国立市西 3-7-29 アゼリア国立２-101　長沢方（TEL042-577-6855）

9 月の赤米作り---------- 2348
おしらせ----------2350
おたより----------2353
国分寺市の稲作農具（V）----------長沢利明 2353
表紙解説：江戸東京ゆかりの植物⑨―ムサシノキスゲ―　---------- 2354

［2021 年版赤米栽培マニュアル］

9 月の赤米作り

●９月の赤米稲作りのポイント

赤米作りも、いよいよ最終段階に入ってきました。今月は赤米稲にも花が咲いて、稲穂が稔り始めます。豊かな収穫の秋を迎えるために、今回は出穂・開花期の諸注意を解説しておきましょう。

●出穂・開花期の赤米稲

赤米稲の出穂・開花はたいていの場合、９月初旬頃にいっせいに始まり、いっせいに終わります（品種によっては７～８月に開花するものもあります)。苗の草高はこの時点ですでに１ｍを越え、１ｍ20 ㎝～１ｍ50 ㎝ほどになっていますが、茎の先端に細くて短い、槍のように尖った最後の葉が、１枚あらわれます。これを「止め葉」といい、これが出てくると、いよいよ出穂が始まるサインです。出穂の当日朝、止め葉の根元から稲穂が伸び出してきますが、赤米稲の穂には長い芒があるので、まずはその芒の先端が姿をあらわします。赤く細いブラシの毛のようなものが、茎の先から飛び出しているのが見えましたら、いよいよ出穂の始まりです。

ものの２～３時間で、穂はスルスルと伸び出して完全に止め葉の根元から離れ、ピンとまっすぐに立った状態で、その全容をあらわします。時には長い芒が茎の先端部にひっかかって、うまく出穂できないこともありますが、人間が手伝ってやらなくとも、自然に内側から押し出されていきますので、放っておきましょう。農家では稲穂を傷つけることのないようにと、出穂・開花時には決して田に入らないそうです。

写真９　赤米稲の開花

１本の稲穂は、この日の夕方までには出穂が完了し、早いものではその日のうちに開花を始めますが、たいていは翌朝から花が開きます。穂の上の方から蕾が縦に割れ、中から白い雄しべが外に飛び出します（写真９～10)。開花は上から下へと順に進んでいきますが、ひとつの花の開花時間はわずか１時間ほどで、すぐに開花が終了します。とはいえ、１本の穂にはたくさんの花がついていますから、上から下へと次々に順番に開花していくので、つねにいくつかの花が開いており、１～２日間は開花を観察することができます。一つ一つの花は開花中に自家受粉をおこない、雄しべの花粉が雌しべに付着して受粉がおこなわれるのです。こうして受粉を終えると花は閉じ、あとは結実・登熟へと向かいます。このように、赤米稲の出穂・開花はほぼ同時進行

でおこなわれていきます。

●出穂・開花期の水の管理

出穂・開花期のミニ田んぼの水位は最大限にまで上げ、たっぷりと水を入れてやりましょう。この時期の水不足・土の乾燥は禁物です。プランターやバケツの水漏れがないかどうか、よくチェックして、つねに水を深く満たすようにしてやって下さい。

赤米稲の稲穂は、開花後４～５日で穂がばらけ、傾いて垂れ始めます。さらに 10 日もたちますと、すっかり実が入って稲穂が重くなり、ダラリと垂れ下がります。すべての稲穂が垂れ下がり、十分に実が入ると、もう田に水は不必要です。ミニ田んぼの水を完全に落とし、田を干して下さい。その後は、稲刈りの時の水田の土の状態に持っていけばよいのみで、これ以降はミニ田んぼにまったく水を入れないで下さい。赤米稲の稲穂は、開花後１ヶ月で完全に実が熟しますので、ようやく稲刈りをすることができます。

●品種別の隔離

さて、ここで気をつけねばならないことがひとつあります。それは赤米稲の各品種の花粉が混じり合って交雑することのないように、それぞれのミニ田んぼを互いに離して隔離するということです。複数の品種を同時に栽培しておられる方々は、出穂・開花が始まったならば、ただちにその措置を取って下さい。プランターやバケツを移動させ、互いにそれぞれの品種が隣接しないように、離して置いて下さい。

かつて通常稲の水田には赤米がよく混入し、それを根絶するために農家は非常に苦心を重ねてきました。品種どうしの隔離が不徹底ですと、そのようなことも起こり、湿地の深田や寒冷地での稲作に大きく貢献してきた赤米稲が、悪者・雑草扱いされてしまう結果をもたらしました。そこで私たちもまた、品種別隔離をきちんとやっておく必要があるわけなのです。

通常稲の田への赤米の混入現象は、実際には両者の交雑によって生じることはほとんどないといわれています。赤米稲は通常稲よりもずっと早い時期に開花し、開花期が重ならないので、交雑する可能性はきわめて低いわけです。しかも、すでに述べたように、稲の生殖は自家受粉によってなされるものですし、ひとつの稲の花の開花時間はわずか１時間に過ぎず、その間に他の株の花粉を雌しべが受粉する機会は（まったくないとはいえませんが）、まずほとんど起こらないといってよいのです。とはいえ、万一の可能性に備えておくということは大切で、品種間の交雑を防止し、品種の純血性を保つためにも、隔離をおこなう必要があるわけなのです。また、隣り合うミニ田んぼの赤米稲からこぼれた種子が、土の中にまぎれて残存することもありますから、それをふせぐためにも隔離は必要です。

赤米は野生稲・雑草特有の性質を持っていて、その実は非常に脱粒性が高く、ぼろぼろとこぼれて散りやすいのです。田の土に残された赤米の種子が翌年発芽し、別品種と混じりあうことも考えられます。特に種子島種や武蔵国分寺種などは非常に脱粒性の高い品種ですので、収穫前にかなり多量の種子が穂からこぼれ落ちます。厳重な隔離をおこなって下さい。それぞれのミニ田んぼには、つねに単一の品種のみを栽培するようにし、その純潔性を厳格に維持していっていただきたいと

思います。

●風倒防止対策について

出穂・開花時の防風対策は特に重要です。草高も伸びてますます風害を受けやすくなってきている赤米稲の苗に、強風が当たって茎が傾いたり、倒れたりすることは、何としても避けなければなりません。これは出穂後の苗にかぎらず、その直前の穂ばらみの段階についてもいえることで、いったん風で倒れた稲はまずほとんど結実しませんし、稔ったにせよ中身のない空籾になってしまいます。台風の接近時に、バケツごと屋内に避難させることはいうまでもありませんが、ミニ田んぼそのものにも風よけ紐を張って、茎や葉が風の影響を受けることのないように、守ってやるとよいのです。あまり強い風の当たらない場所ならば、特にこれをおこなう必要はないのですが、心配であればやって下さい。風よけ紐の掛け方は、各自工夫していろいろやってみるとよいでしょう。

もっとも簡単な方法としては、ミニ田んぼ内に何本かの支柱を立てて間に紐を張り、稲を支えてやるやり方があります。支柱は木や竹の棒を何本か立てればよいのですが、もっとも具合のよいのは朝顔などをからませるための、園芸店で売っているあの緑色の園芸用支柱です。紐は荷造り用の紐でよく、支柱の間に張りめぐらせて粗い網状にします。紐を張る高さは、ちょうど稲の穂首の下あたりの位置がよく、あまり低すぎては効果がありません。稲穂が紐の上に顔を出すくらいの高さが適当です。こうしてやれば、多少の強風でも紐が支えてくれますので、稲が倒れたりすることがありません。稲の１株に１本ずつ支柱を立てて紐で縛り、茎を支えてもよいと思います。さあ来月には、いよいよ待ちに待った稲刈りを迎えることになります。収穫の秋を、大豊作の喜びで迎えようではありませんか。もう一息ですから手抜きをせず、ラストスパートをともに頑張りましょう！

おしらせ

●赤米ビール、販売順調！

本誌前号でも紹介しておきましたが、「武蔵国分寺種」赤米を原料に用いた赤米ビールを作ろう、という関係者らの努力が実を結び、ついにその悲願がかなえられて、本格的な店頭販売がすでにスタートしております。この事業を企画したのは、「国分寺赤米プロジェクト（坂本浩史朗代表）」で、醸造を請け負っているのは「Kunitachi Brewery（東京都国立市東3-17-28 草舎ビル１階）」、醸造責任者は斯波克幸さんです。販売元は「せきや（東京都国立市中1-9-30 せきやビル１階）」となっています。赤米ビールは、「あめにうたえば」と名づけられました（次頁参照）。これを醸造した斯波さんによれば、「今回は残念ながら、ビールに赤米の赤い色を残すことはできませんでしたが、今後とも研究を重ね、秋までには何とか、真っ赤な色のビールの醸造を成功させたいと思っています」とのことでした。赤米ビールは、国立市の「せきや」で販売されておりますが、加熱処理をしていない生ビールですので、缶やビンに詰められてはおらず、特別な加圧ボトルを用いた詰め替え方式で売られています。お店で味わってみたいという方は、国分寺市の「胡桃堂喫茶店（東京都国分寺市本町 2-17-3）」へ行って注文すれば、いつでも呑むことができます。国立市内では、

国立駅前南口のビアホール「Craft Kunita-chika（東京都国立市中1-9-30せきやビルB1階）」、あるいは「くにたち村酒場（同）」などでメニューに載せられております。ぜひ一度、お出かけ下さい。

●国分寺跡の赤米畑は順調！

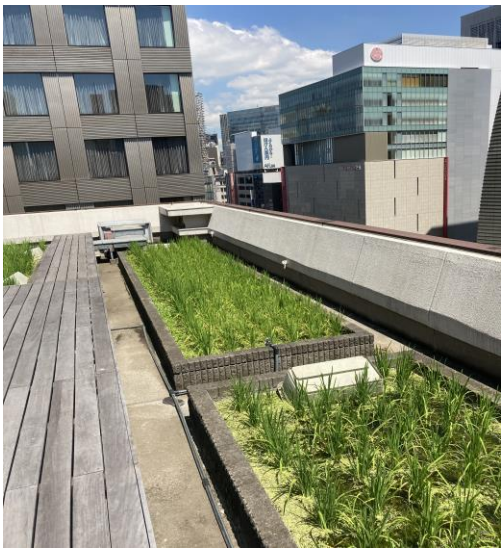
国分寺赤米会の管理する、武蔵国分寺跡地の赤米畑は、一昨年から昨年にかけ、不作が続いておりましたが、土壌改良などが効を奏し、今年はとても順調です。すでに、ずしりと重い稲穂が稔って垂れており、収穫を待つばかりの状態です（写真参照）。今後は台風の大風だけが心配なのですが、オリンピックの頃に西日本を直撃した台風9号の余波で、国分寺市にも強い風が吹き渡り、一部の赤米稲が風倒して、赤米畑にも少し被害が出ました。赤米会では会員たちに緊急招集をかけて、ただちに畑の中に支柱を設置し、懸命の努力で何とかピンチを切り抜けてきました。10月にはここで、小学生5年生たちによる稲刈り実習がなされることになっていますので、ぜひ成功させたいものです。

赤米稲は見事に育っています。

この見事な稲穂を見て下さい！。

●「天空農園」を見学！

日本酒メーカーの大手、白鶴酒造の東京支社（東京都中央区銀座 5-12-5）では、銀座の歌舞伎座の目の前に立つ自社ビルの屋上に水田を設け、「天空農園」と名づけて酒米の栽培に取り組んでいます。そこに植えられる稲は「白鶴錦」という酒米品種で、それを仕込んで作られた純米酒を「白鶴翔雲純米大吟醸・銀座天空農園白鶴錦」と銘打って販売もしております。農園は当初、屋上にプランターを並べるだけだったとのことですが、2008 年に本格的な水田に改修し、地元の小学生らに田植えや稲刈りをしてもらいつつ、2013 年から収穫米を用いての酒造りもなされるようになりました。本年 8 月、国分寺赤米会ではこの白鶴酒造の「天空農園」の見学会を実施し、会員たちが実際にそれを見てきました。なぜならば国分寺市では現在、市役所新庁舎の建設事業を推進中で、その新庁舎の竣工したあかつきには、庁舎の屋上にビオトープ水田を設置し、「武蔵国分寺種」赤米稲を栽培してはどうかという提案が市民から出されており、それが実現するか否かは別として、参考のために白鶴酒造の「天空農園」を見ておこうということになったわけです。銀座の街のど真ん中にある「天空農園」には見事に酒米稲が育っており、水田の面積は約 100 ㎡で、昨年はそこで約 50 kgもの収穫米が得られたとのことです。このような素晴らしい施設を、国



これがビルの屋上の「天空農園」です。

ここは銀座のど真ん中！。

分寺市の新庁舎屋上にも、ぜひ作ってもらいたいものです。

おたより

●赤米は元気に育っています（高橋寿子）

『赤米ニュース』、いつも楽しみに拝見しております。マニュアルに従っていて、我が家の赤米は元気に育っております。「江戸東京ゆかりの植物」の写真は見事で、毎回楽しみです。七月号のセンナリホオズキは見たことがなく、浅草寺のホオズキ市の実情も、初めて知りました。二十歳の頃、日光へ行く道すがら立ち寄り、四万六千日の御利益を喜んだ昔を思い出しました(7/13・東京都国分寺市)。

国分寺市の稲作農具(Ⅴ)

長沢　利明

2　耕起作業と農具・つづき

四本刃のマンノウは、全国的に見れば「備中鍬」と呼ばれているものであるが、北多摩地域で「備中鍬」といえば、重量級の中型平鍬を指してそう呼ぶことが多いので、気をつけなければならない。

図7には榎戸新田の平鍬3点を掲げておいたが、いずれも畑作用で、上段が角櫃つきの新しいタイプの鍬である。中段はトンビグワ（鳶鍬）などとよく呼ばれている古いもので、刃先がトンビの尾羽の形に似ているので、そう呼ばれる。刃床と一体化した角櫃部分に柄を通し、楔金具をそこに打ち込んで刃部を固定している。重量のある厚刃の鍬で、俗にアナホリグワ（穴掘り鍬）などとも呼ばれるように、畑を深く掘り起こすのに適しており、陸稲栽培用のみならず、ジャガイモの収穫などにも併用されている。下段は窓鍬型の平鍬で角櫃がなく、鉄輪と鉄釘とで柄と刃床とを連結している。

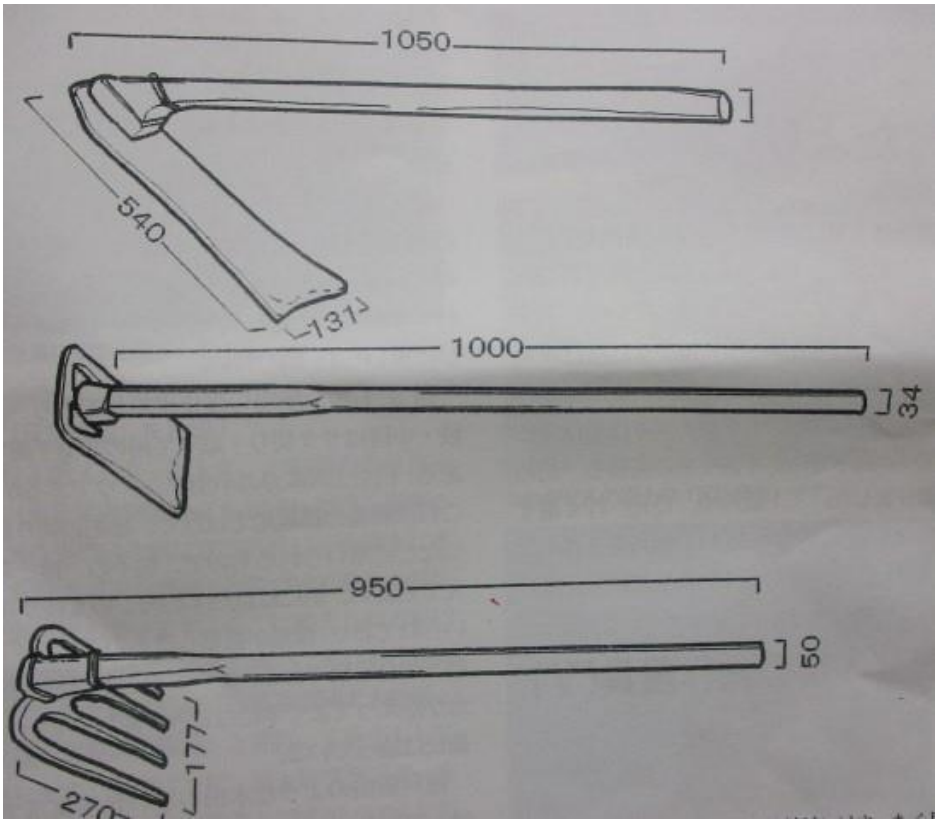
図8は榎戸新田のマンノウで、三本刃のものを「三本鍬（さんぼんぐわ）」、四本刃のものを「四本鍬（しほんぐわ）」とも呼ぶ。いずれも深耕用の土起し具であって、田畑の荒起しに用いられ、柄も長い。

図9も榎戸新田の畑作用農具であり、上段・中段はサク切り・畝立て用の小型平鍬である。下段は四本刃の小型マンノウであるが、これは圃場の耕起用ではなく、堆肥の切り返しなどに用いられるもので、熊手の一種と考えてもよい。柄には自然木のカシの太枝が用いられており、棒屋が整形したものではなく、農家の自家製である。ゴツゴツとした握り具合がかえってよく手になじみ、使いやすいと農民は語っている。

榎戸新田のような水田のない新田集落では、田のクロケズリ（畦削り・水田の畦を削る作業）やクロツケ（畦付け・水田の畦に泥を塗って整形する作業）に用いられるような、刃床部が幅広型の大型平鍬は当然なく（写真2）、陸稲栽培用の農具はほとんど蔬菜生産用

写真2　クロケズリ（東京都狛江市駒井・1983年）

図6　榎戸新田の鍬



のそれが併用されてきたのであった。

さて荒起しが済み、マンノウなどを用いてさらに土塊を細かく崩していくための耕起作業が始まると、初めてそこで馬が登場する。特に水田耕作の場合、農耕馬の力は不可欠なもので、農家では馬力による本田の耕作をおこなった。本村や恋ヶ窪では戦前、さかんに馬力耕作がなされていたのであるが、自家で馬を飼う家は少なく、多くの場合、農耕馬は馬喰から借りていた。　（つづく）

［表紙解説］

江戸東京ゆかりの植物⑨―ムサシノキスゲ―

ムサシノキスゲ（武蔵野黄菅）は、府中市の浅間山にのみ自生する貴重な植物で、他地域にはまったく見られない。美しいユリ科の植物で、初夏に咲く大きな黄色い花は、まるで尾瀬のニッコウキスゲを見るかのごとくだ。それもそのはず、ムサシノキスゲは分類学上はニッコウキスゲの一変種なのであって、ニッコウキスゲよりも花筒が短くて苞は丸みを帯びる。雄しべの葯も短いし、花には芳香がある。また、ニッコウキスゲは一日花なので朝に開花して夕方にはしおれるが、ムサシノキスゲの花は一晩おいて翌日まで咲き続ける。高山植物であるニッコウキスゲの一変種が、標高70～80mの浅間山になぜ自生しているのかはわからないが、それがニッコウキスゲの低地型一変種であることは確かだ。浅間山のムサシノキスゲは府中市の天然記念物に指定され、手厚く保護されている。